

イギリスのビジュアルアーティストNick Veasey氏によるX線写真の展覧会“X-RAY”、MB&F M.A.D.Galleryにて開催

イメージやうわべばかりに囚われがちな今日の社会で、Veasey氏は、物事を真に構成するものを問い、探索し、現代の空虚さに立ち向かっている。物を創造し、変形させるのではなく、Veasey氏はそこに存在し得る物つまり、知っていると思いついでいたにも関わらず、実際はそうではなかった、というオブジェに常に焦点を当てているのである。

Veasey氏は人工、自然を問わず、日常よく使用するあらゆる物の細かい層や構造を表現するため、放射線画像装置を使用し、ごく普通の物を魅惑的に表現するという、物の「肖像画」を作成している。

場合によっては死に至りかねない量のX線を浴びながら制作活動に臨む彼の作品は詩的かつ優雅。普段は見ることができない世界への扉を開いてくれる。幽霊を想起させながらも、穏やかな側面を持つ固形の物体に入り込み、新しい世界観に触れ、新鮮な視点で現実を見つめるという感覚を与えてくれる。

Veasey氏の作品は芸術と科学の融合が生む典型的な例であり、「写真」の域を超えている。M.A.D.Galleryのみに限らず、科学研究所までもが彼の作品展の開催を希望するという厳粛さを持ち合わせている。

今回M.A.D.Galleryは、Nick Veasey氏の「Matchless Rider」、「Mitchell Film Camera」、「Decks」、「Airport X-ray」、「Typewriter」、「VW Beetle」、「Superman and Clark Kent」、「Lightbulb」という8作品を展示。プリント版またはDiasec（ディアセック）版で作品を注文することも可能。「Superman and Clark Kent」ではレンチキュラー版も存在し、クラーク・ケントがスーパーマンに、スーパーマンがクラーク・ケントに姿を変える過程を楽しめる。

Veasey氏のX線プロセスについて

Veasey氏は、元冷戦時代にスパイ用基地とされていた英国南部、ケントの草原に位置するRadar Studioを軍組織から購入し、改装。少数のチームと共に作業をしている。致死量に達しかねないX線の電磁波量と使用時間を考慮し、Veasey氏にはこの隔離された立地条件が非常に重要となる。「健康に楽しかねない問題を考えれば、自宅の隣でX線機器を使用されては誰もが嫌がるでしょう」と氏は語る。

作品用の写真を撮る上でVeasey氏は、フィルム粒子がなく極めて鮮明なイメージを実現する緩焼性フィルムを使用している。病院などで見かけるX線装置とはどこか違う。病院で一般に使用されているX線装置は出力量100キロボルトで0.2秒発射されるのに対し、Veasey氏の機器は200キロボルトの出力量で、発射時間は時によっては20分にも達する。

これを考慮し、当然のことながらVeasey氏は多くの対策を取っている。X線が壁を貫通しないよう、スタジオには「lignacite」と呼ばれる厚さ10cmの建材用ブロックが使用されている。床はX線を吸収する高密度コンクリート製、X線エリアの出入口を遮断する鉛と鋼鉄製の扉の重さは1250kg。かつてVeasey氏は「これまで2回ほど放射線被爆を経験しました。そうです、2回です。たった2回と言えども被爆は蓄積するので、一生残ります」と経験談で語っている。

極めて高い放射線レベルを使用することは、Veasey氏が人間や動物を被写体にする際に、骸骨または死亡して間もなく、寄付という形で提供された遺体を使わなければならないことを意味する。「芸術や科学のためにご自身の遺体の寄付を希望される方もいます。また、ご遺体の寄付がある場合には、私は入手希望者として手を挙げます」。

写真はそれぞれ、35cmx43cmフィルムで比率通りに撮影される。電球などの小さい物体を撮影する場合にはスペースの問題はない。ただし、フォルクスワーゲンのビートルの撮影となると、Veasey氏は車一台を解体し、各部品を個別にX線撮影しなければならず、作業に何ヶ月も要する。

詳細お問い合わせ:

Juliette Duru, MB&F SA, Rue Verdaine 11, CH-1204 Genève, Switzerland

メール: jd@mbandf.com 電話: +41 22 508 10 36.

「車を一度でX線撮影するのは技術的には可能です。しかし非常に雑多な結果となるでしょう。全てを解体し、部品を一つひとつX線撮影し、可能な限りの美しい仕上がりを目指すのです。それから再度組み立て直します。」

Veasey氏は撮影したX線写真を最終的に1980年代のドラムスキャナーに通してデジタル化する。氏によると、ドラムスキャナーは「スキャナー中のスキャナー」であり、過去に試したどのスキャナー機器よりも詳細を見事に演出し、「最も素晴らしい、高解像度」画像を可能にするのだそう。デジタル化された画像はPCで読み込み、重複したX線部分を削除しつつ、丁寧に組み合わせられる。

作品の仕上がりからだけでなく、Veasey氏は作品作りの行程にも多くの喜びを感じると語っている。

「慣れ親しんだ仲とあっていても、背後からふいに攻撃をされるような驚きがあるのがX線の楽しみ。間違えることもあります。誰でも失敗はするものです。失敗から学んでいくのです。露出過度であったり露出不足であったり、色のトーンが十分に出ない時もあります。その点、写真撮影と似ていますが、X線の場合は透明な画像なので、焦点がないのです。照明具合も関係ありません。X線は独自の発光スペクトルを持っていて、人間の視覚では確認できないのです。」

「だからこそ何度も何度も実験を繰り返します。写真家と同じように、露出を調整してみたり、被写体までの距離を変えてみたり、違うフィルムで撮影してみたり。写真家がレンズやフィルムやISO感度を変更するように、私も色々と試行錯誤をして、最高の写真を撮ろうとしているのです」と氏は締めくくる。

Nick Veasey

1962年にロンドンで生まれたイギリスの芸術写真家Nick Veaseyは10代の頃から既に写真への興味を示し始め、30代の頃にプロとなる。後、10年間はその大半を広告およびデザイン業界で活動し、旧来のスチル写真撮影に焦点を当てる。同時期、あるテレビ番組のため、ソフトドリンク缶にX線をかけるよう依頼されたのが、X線を撮影法として取り入れるきっかけとなる。Veasey氏は缶だけでなく、その日履いていた靴もX線で撮影し、それらの写真があるアートディレクターに見せたところ、好感触のコメントが得られ、X線写真撮影を追求していく決心をした。

以降、Veasey氏は主にX線画像で活躍。霊妙でかつ魅惑的な彼の作品は世界中のギャラリーで展示されている。また国際的な広告キャンペーンや製品のパッケージ等にも作品が採用された他、数々のフォトコンテストでデザイン賞を受賞している。

年月を経て、今では数多くのX線写真を手掛けるVeasey氏。テディベア、アイスクリームコーン、花などの日常的な小さな物から、車、乗客で満員のバス、実物大のボーイング777や旅客機の格納施設までも被写体としてきた。

「人々の興奮を呼び起こし、周囲の物を改めて新しい視点で見てもらえるよう、手助けがしたいのです。X線は実直なプロセスです。物事の姿をありのままに見せるのです。うわべだけが注目されるこの世の中で、とても新鮮な観点だと思えます。製品または生命体の構造を見せてくれる、設計、巧妙な造り、欠点などその全てを見せてくれます。」

「完全な美が親しみやすさを誘いがちで、私たちは皆、自分たちの周りにあるものをその外観に基づいて判断し、美的感覚に訴える人や物に惹かれます。だからこそ、驚くべき内なる美に焦点を当て、ある意味自動的とも言える、私たちが持つ見た目に対する反応にチャレンジしたいのです。」と氏は語る。

詳細お問い合わせ:

Juliette Duru, MB&F SA, Rue Verdaine 11, CH-1204 Genève, Switzerland

メール: jd@mbandf.com 電話: +41 22 508 10 36.